

『源氏物語』 葵巻における雲と雨の哀傷

二宮, 愛理
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1516165>

出版情報 : 語文研究. 117, pp.1-15, 2014-06-13. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

『源氏物語』 葵卷における雲と雨の哀傷

二 宮 愛 理

はじめに

源氏の妻・葵の上が死去したのは、葵卷八月廿余日のことである。後には源氏と遺児・夕霧が残され、源氏をはじめ周囲の人間は悲しみに沈んだ。葬送が終わり、四十九日までの七日ごとの法要が済んだ頃、既に季節は晩秋であるが源氏は未だ喪に服し、左大臣邸に籠っている。そんな源氏を友人であり義兄でもある三位中将（頭中将）が見舞う。時雨が降る庭を見ながら源氏が漢詩の一節「雨となり雲とやなりにけん、今は知らず」を口遊んだ。中将がそれを聞いて「雨となりしぐるる空の浮雲をいづれの方とわきてながめむ」と歌を詠み、「行く方なしや」と独り言のように言う。源氏が「見し人の雨

となりにし雲居さへいとど時雨にかきくらすころ」と歌を返し、中将はその源氏の姿に感じ入り、葵の上の薄命を嘆く。これは葵の上の死後、若紫との新枕を経て、巻の終わりまで続く葵の上追悼のうち的一幕（葵——五四～五六頁）である。（引用者注：『源氏物語』の引用は新編日本古典文学全集に拠り、巻名と所出ページを付した。以下同）

ここで源氏が詠じた言葉は、漢詩の一節であるとの指摘が古注釈の時代からなされている。しかしこれまでの注釈書においては、本当に典拠を踏まえた上での本文解釈がなされているといえるのであるうか。『源氏物語』には漢籍を典拠に持つ表現が多くある。しかし現代におけるそれらの研究は典拠そのものを追いかけることに力が注がれていて、物語そのものの解釈にまで十分に還元されてこなかったのではないだろ

うか。

今回取り上げる場面は、主として源氏が朗詠している漢詩の一節、それに続く中将と源氏の歌二首が漢籍の言葉を利用し、それらを中心に場面が展開している。この漢籍を典拠に持つ言葉に注目し、二つの典拠から「雨となり雲とやなりにけん」という言葉の意味するところを再考する。また源氏の朗詠が書き下し文の形で書かれていることに注目し、作者・紫式部が漢文訓読においてある工夫を行ったのではないかということを指摘する。これらの考察から、漢詩文の典拠を物語の読みに反映させ、より精緻な解釈を進めたい。

一

現存最古の注釈書である藤原伊行の『源氏釈』から、この場面について既に典拠の指摘がなされている。諸注釈類で典拠として指摘されている漢籍は二種類あり、一つは『文選』所収の宋玉による〈高唐賦〉、もう一つは中唐の詩人劉禹錫による〈有所嗟〉である。〈高唐賦〉は劉禹錫の時代にはすでに故事として教養化していて、劉禹錫は〈高唐賦〉の故事を踏まえて〈有所嗟〉を作っているといわれている。伊行は〈高唐賦〉を引き、藤原定家による注釈『奥入』は〈有所嗟〉を

引く。これらの後に続く『紫明抄』『河海抄』には両者が引かれ、以降はこれらに従ったと見える記述が多い。以下は〈有所嗟〉の全文である。(引用者注・傍線は引用者による。以下同)

有所嗟二首 劉禹錫(劉夢得)

庾令樓中初見時 庾令 樓中 初めて見えし時、

武昌春柳鬪腰肢 武昌の春柳 腰肢を鬪(たたか)わ

せり。

相逢相笑盡如夢 相逢い 相笑いしも 盡く夢の如し、

為雨為雲今不知 雨と為り 雲と為る 今知らず。

鄂渚濛濛烟雨微 鄂渚 濛濛 煙雨微なり、

女郎魂逐暮雲歸 女郎 魂逐われ 暮雲歸る。

只応長在漢陽渡 只だ應に 長えに漢陽の渡に在り、

化作鴛鴦一隻飛 化して鴛鴦と作り 一隻で飛ぶ。

白詩(2552) 和劉郎中傷鄂姬 劉郎中の鄂姬を傷むに和す

不獨君嗟我亦嗟 獨り君の嗟くのみならず 我も亦嗟く、

西風北雪殺南花 西風 北雪 南花を殺らすを。

不知月夜魂歸處 知らず 月夜 魂の歸る處を、

鸚鵡洲頭第幾家 鸚鵡洲頭 第幾家ぞ。

姫、鄂人也

姫は鄂の人なり

〔柴格朗訳注「劉白唱和集（全）」一八八—一九一頁／勉誠
出版／二〇〇四〕

〈有所嗟〉は元々劉禹錫と白居易の唱和詩であり、劉禹錫の愛人の死に際して詠まれた作品である。劉禹錫の二首は、庾令の地で初めて会った女性と過ごしたことも今では夢のようである。死んだ女性の魂は暮れ方の雲を追って帰り、漢陽で一羽きりのオシドリになっている——という内容である。それに対して白居易は、彼女の死を嘆いているのは君一人ではない——というように応じ、劉禹錫の傷心を慰める。傍線部で示した通り、劉禹錫の一首目に源氏が詠じたほぼそのままの「為雨為雲今不知」という一節があり、典拠であると考えられるには十分であろう。また、〈有所嗟〉は〈高唐賦〉を踏まえて作られていると先に述べたが、この一句がそれにあたる部分である。

では「為雨為雲今不知」は〈高唐賦〉の何をどのように踏まえているのか。それを明らかにするため、今度はその〈高唐賦〉の序文を見てみよう。〈有所嗟〉はこの〈高唐賦〉から生まれた故事成語を用いている。

高唐賦 序 宋玉

昔者楚襄王、與宋玉遊於雲夢之臺、望高唐之觀、其上獨有雲氣、崢嶸直上、忽兮改容、須臾之間、變化無窮。王問玉曰、此何氣也、玉對曰、所謂朝雲者也。王曰、何謂朝雲、玉曰、昔者先王嘗遊高唐、怠而晝寢、夢見一婦人、曰、妾巫山之女也、爲高唐之客、聞君遊高唐、願薦枕席、王因幸之、去而辭曰、妾在巫山之陽高丘之阻、旦爲朝雲、暮爲行雨、朝朝暮暮、陽臺之下、旦朝視之如言、故爲立廟、號曰朝雲。

昔者楚の襄王、宋玉と雲夢の臺に遊ぶ。高唐の觀を望むに、其の上に獨り雲氣有り。崢嶸として直ちに上り、忽として容を改む。須臾の間に變化して窮まり無し。王玉に問ひて曰く、此何の氣ぞと。玉對へて曰く、所謂朝雲なる者なりと。王曰く、何を朝雲と謂ふと。玉曰く、昔者先王嘗て高唐に遊び、怠りて晝寢ぬ。夢に一婦人を見るに、曰く、妾は巫山の女なり。高唐の客爲り。君の高唐に遊ぶを聞き、願はくは枕席を薦めんと。王因りて之を幸す。去りて辭して曰く、妾は巫山の陽、高丘の阻に在り。旦に朝雲と爲り、暮に行雨と爲る。朝朝暮暮、陽臺の下にありと。旦朝に之を視るに言の如し。故に爲に廟

を立て、號して朝雲と曰ふと。

〔新釈漢文大系「文選（賦編）下」卷十九 三四三頁／明治書院／二〇〇一〕

楚の懷王が巫山の地で見た夢に美女が現れ、王と契りを交わした後、去り際に「朝には雲、暮れには雨となつて参る」と言い残した。王が目覚ますと女の言つた通りになつていた——という詩賦の内容を要約している。この夢で出会つた神女と一時を過ごしたエピソードは、後世に残る故事となつた。〈有所嗟〉の「為雨為雲」という言葉は現代に残る四字熟語「朝雲暮雨」「巫山雲雨」といつた言葉と同じく、この〈高唐賦〉から生まれた故事成語となつており、「美女」「男女の契り」を表す言葉であるといわれている。

劉禹錫はこの故事を「為雨為雲」という言葉で〈有所嗟〉に用いているのであるが、〈有所嗟〉で用いられている「為雨為雲」が、本当にその故事の意で使われているのか、劉禹錫以前の中国における用例から確認しておく。

（ア） 公子行 劉廷芝

（略）

花際俳諧雙蛺蝶

花際 俳諧す雙蛺蝶。

池邊 顧歩す兩鴛鴦。

傾国傾城漢武帝 池邊 顧歩す兩鴛鴦。 国を傾け城を傾く漢の武帝。

為雲為雨楚襄王 雲と為り雨と為る楚の襄王。 ……

〔新釈漢文大系「唐詩選」卷二 二〇八～二〇九頁／明治書院／一九六四〕

七世紀の唐の詩人・劉廷芝の詩である。美しい女性たちを描写する中に「為雲為雨」の言葉が見える。「傾国傾城」「漢の武帝」と並べて「為雲為雨」「楚の襄王」が対句にされており、ここでは美女を指す言葉、または王がその美女を愛したことを表現する言葉として用いられている。劉禹錫は八〇九世紀の人であるから、劉禹錫が登場する前から〈高唐賦〉の雲と雨に由来する言葉は「美女」、またはその美女と関係を持つことを指すものとして用いられていることが分かる。

一方〈有所嗟〉の一首目を見てみると、こちらも第三句と「為雨為雲」を含む第四句が対句になっている。「相逢相笑盡如夢——互いに出会い笑い合ったのも夢のようだ」といった言葉と、「為雨為雲今不知——睦まじく契りを交わしたことも今は分からない」という言葉が対になっているのである。源氏が朗詠したのは「為雨為雲今不知」にあたる一節のみでいかに断片的であったが、直接の典拠である〈有所嗟〉では、

こういった文脈で用いられている。しかし断片的であるとはいえ、漢籍の教養を持った紫式部のこと、この故事のことは知って使っていると見て間違いないだろう。この故事は次節で挙げる例のように、日本の作品においても〈高唐賦〉の故事の用例が多数ある。先に挙げた〈公子行〉と〈有所嗟〉は中国での用例であるが、源氏に引用されるまで、日本においてこの故事はどのように受容され、使われていたのだろうか。次節では、この故事について主に日本での用例を中心に考察していく。

二

作者・紫式部が源氏に「雨となり雲とやなりにけん」と言わせる以前には、この故事は如何に人々に知られ、使われていたのだろうか。『源氏物語』以前の例では、古くは『万葉集』の「松浦川に遊ぶ」という一連の作品群の序文に「あるときには巫峡に臥して空しく煙霞を望む」という一文が見られる。

(イ) 万葉集「遊於松浦河序」

遊於松浦河序

余以暫往松浦之具道遥、聊臨玉嶋之潭遊覽、忽值釣魚女子等也。花容無双、光儀無匹。開柳葉於眉中、發桃花於頰上。意氣凌雲、風流絕世。僕問曰、誰鄉誰家兒等、若疑神仙者乎。娘等皆咲答曰、兒等者漁夫之舍兒、草庵之微者。無鄉無家、何足称云。唯性便水、復心樂山。或臨洛浦而徒羨玉魚、乍臥巫峡以空望烟霞。今以邂逅相遇貴客。不勝感応、輒陳歎曲。而今而後、豈可非偕老哉。下官対曰、唯々、敬奉芳命。于時、日落山西、驪馬將云。遂申懷抱、因贈詠歌曰、

阿佐里須流 阿末能古等母等 比得波伊倍騰 美流

尔之良延奴 有麻必等能古等

松浦川に遊ぶ序

……娘等皆咲み答えて曰く、「児等は漁夫の舎の児、草の庵の微しき者なり。郷もなく家もなし、何ぞ称げ云ふに足らむ。ただ性水に便ひ、また心に山を樂しぶ。あるときには洛浦に臨みて徒らに玉魚を羨しみし、あるときには巫峡に臥して空しく煙霞を望む。今邂逅に貴客に相遇ひぬ。感応に勝へず、輒ち歎曲を陳ぶ。今より後に、

豈あにかいろう倍老ばいろうにあらざるべけむ」といふ。下官げつかん対たいへて曰く、「唯を々つし、敬うけたまみて芳命ほうめいを奉ほうはらむ」といふ。時に、日は山の西にしに落ち、驪馬りば去さなむとす。遂すなはに懷抱かいぼを申のべ、因よりて詠歌を贈りて曰く、

あさりする 漁夫いさなの子どもと 人は言へど 見るに
知らえぬ うまひとの子と

（新編日本古典文学全集『万葉集』八五三序 五一―五三頁
／小学館／一九九五）

松浦河に出掛けた折、そこで出会った美しい娘たちと歌を贈答し合ったという話が語られる。作者が娘たちに「あなた方は仙女ではないか」と身上を尋ねたところ、娘たちの返答の中、傍線部に「ある時は巫山に横になり、霞を眺めておりました」という言葉で〈高唐賦〉の地名が現れている。ここでは天女のような神秘的で美しい女性たちが登場しており、その女性に〈高唐賦〉を意識した言葉を言わせている。この序文に続く歌群では男女の贈答を重ねていて、〈高唐賦〉〈有所嗟〉にあるような別れの描写はない。この点は次の『懷風藻』の例も同様である。

(ウ) 懷風藻「詠美人」

正六位上左大史荊助仁。一首。 年三十七。

五言。美人を詠む。一首。

巫山行雨下。洛浦廻雪霏。

巫山行雨下り、洛浦廻雪霏ふざんかろうふ。

月泛眉間魄。雲開髻上暉。

月は泛うかぶ眉間の魄、雲は開けいじやう髻上の暉。

腰逐楚王細。體隨漢帝飛。

腰は楚王を逐おひて細く、體は漢帝に隨かんていひて飛ぶ。

誰知交甫珮。留客令忘歸。

誰か知らむ交甫が珮、客を留とどめて歸かへりを忘れしむることを。

（日本古典文学大系『懷風藻』一〇二―一〇三頁／岩波書店
／一九六四）

右の『懷風藻』の例は、「美人を詠む」と題される詩である。美女の離れがたい美しさを故事に寄せて歌っていて、冒頭から「巫山行雨下り」というように〈高唐賦〉の地名が登場している。先にあげた『万葉集』の例にも「巫峡に臥して空しく煙霞を望む」に並んで「洛浦に臨みて」という言葉があるが、「洛浦」という言葉がここでも「巫峡」と対句的に用いられている。これは〈高唐賦〉と同じく『文選』に収めら

れている〈洛神賦〉という作品を典拠とした言葉で、〈洛神賦〉は〈高唐賦〉に影響を受けて作られた作品である。この二種類の美女の表現は、日本における漢詩文の中でもしばしば並べて使われている。

このように「巫山」「洛浦」といった言葉は、「懷風藻」が編纂された頃からすでに日本においても神仙的美女を思い起こさせる言葉として用いられていたことが窺える。「懷風藻」の例も「松浦河に遊ぶ」と同じく、美女についてのものであり、ここにも「別れ」の要素は含まれていない。一方、次の引用は「洛雪」「巫雲」を用いながら女性の死を主題にした作品である。

(エ) 文華秀麗集「奉和侍中翁主挽歌詞」

「侍中翁主挽歌詞」に和し奉る。二首。 菅原清公

(二首略)

鳳掖榮華盡。爲書卜兆通。

向朝傷薤露。欲暮泣楊風。

漢浦星光缺。秦樓月影空。

定知雲雨貌。長絕楚臺中。

鳳掖榮華盡き、爲書卜兆通ふ。

朝に向かひて薤露を傷み、暮に欲して楊風に泣く。

漢浦星光缺け、秦樓月影空し。

定めて知る雲雨の貌、長に楚臺の中に絶ゆることを。

「侍中翁主挽歌詞」に和し奉る。二首。 巨勢識人

(二首略)

曉月銘旌出。春山轅馬通。

繁筵悲薤露。畫翬送松風。

洛雪廻光罷。巫雲行影空。

可嗟桃李貌。長掩重泉中。

曉月銘旌出で、春山轅馬通ふ。

繁筵薤露悲しく、畫翬松風送る。

洛雪廻光罷み、巫雲行影空し。

可嗟桃李の貌、長に重泉の中に掩はれむことを。

可嗟桃李貌。長掩重泉中。

嗟くべし桃李の貌、長に重泉の中に掩はれむことを。

／＼岩波書店／一九六四
(日本古典文学大系『文華秀麗集』巻中 二七一―二七二頁)

本来は一人が二首ずつ詠んでいる作品であるが、引用ではそれぞれ一首ずつ割愛している。これらは嗟嘆天皇による挽歌詩に唱和して作られていて、女官かそれに似た立場の女性が亡くなったことを嘆くものである。柩が運ばれていく様子を語り、女性の姿を「雲雨」「洛雪」「巫雲」と表現する。その美しい姿が楼閣の中からいなくなってしまうと嘆く内容である。ここでも先の二例と同じく〈高唐賦〉と並んで〈洛神賦〉が使われ、挽歌詩に和しているということ、この詩は

女性と死別するという『源氏物語』の場面と同じ状況が描かれている。

しかし注目すべきは、この死別の表現は「雲雨」「洛雪」「巫雲」に「長絶」「罷」「空」という言葉を加えて用いての別れの描写となっていることである。先にあげた(ア)～(ウ)の三例と合わせて考えてみても「雲雨」などの言葉は「美女」を指す言葉であり、これらを故事の言葉として使っている詩人たちは、それ自体に別れの要素があるという意識で用いてはいなかったと思われる。些細なことであるが、(高唐賦)の言葉だけでは「死別」の要素を表現せないと、この点は留意しておく必要があるだろう。

ここまで日本における(高唐賦)の故事の用例を見てきたが、ここで(有所嗟)の例も合わせて見ておこう。次の用例には、源氏が引いた「為雨為雲」の箇所は含まれていないが、それと対句になった「相逢相笑」に該当する部分が引用されている。

(オ) 菅家文章「七月七日、代牛女惜曉更、各分一字、應製。〈探得程序〉」

七月七日、牛女に代わりて、曉更を惜しむ、各一字

を分かつ、製に応えまつる

〈探りて「程」の字を得たり〉

年不再秋夜五更 年再びは秋あらず 夜五更

料知靈配曉來情 料り知る 靈配 曉よりこのかたの情

露應別淚珠空落 露は別れの涙なるべし 珠空しく落つ

雲是殘粧髻未成 雲はこれ残んの粧ひ 髻いまだ成らず

恐結橋思傷鵲翅 橋を結ばむことを恐りては 鵲の翅

嫌催駕欲啞鷄聲 駕を催さむことを嫌ひては 鷄の聲

相逢相失間分寸 相逢ひ相失ひて 間むこと分寸

三十六句一水程 三十六句 一水の程

(日本古典文学大系「菅家文章」巻五・三四六 三七七～三

七八頁／岩波書店／一九六六)

(引用者注・引用中の()は割注部分)

第一節で引用した「相逢相笑」とは異同があるが、『奥入』

古注釈にあるものと同じ「相逢ひ相失ひて」という(有所嗟)の語句が用いられ、劉禹錫の作品を典拠としていることが分かる。男女の曉方の別れを織女と牽牛に成り代わって語り、逢瀬の時間の短さを惜しんでいる。新聞一美氏はこの(有所

嗟」が道真の作品に度々利用されていることを指摘されている。漢詩だけでなく願文の中にも引かれていることを鑑み、「平安朝においては、女性の死に際して作られた願文に巫山の神女が登場するが、そうした表現に最も影響を与えたのは劉禹錫の詩だったのではないか」と論じておられる。

このように日本での例においても「有所嗟」からの引用が女性の死を主題としている一方、(ア) (エ)の例で見たように「高唐賦」の故事を用いた言葉そのものでは「美女」や「美女と関係を持つこと」のみが示される。元々「高唐賦」では、夢で出会った神女との別れよりも、彼女の美しさや雲雨となる神秘的なできごとに重きが置かれている。女性との「別れ」といっても、神女は雲雨となって王の元に再び姿を現しているのだから、「高唐賦」の言葉自体には「別れ」や「死別」がテーマに組み入れられている感覚はさほどなかったであろう。日本においてもその意識は引き継がれている。

三

前節では、「高唐賦」〈有所嗟〉両者の日本における受容の様相を確認した。その結果、「有所嗟」にも用いられている「高唐賦」に由来する故事それ自体には「死別」の要素が含ま

れないという結論に至った。それを踏まえた上で『源氏物語』の原文にかえって読解を行っていこう。

しかしその前に、改めて源氏が詠じた一節をみると、「為雨為雲今不知」は「雨となり雲とやなりにけん、今は知らず」と過去推量の語を付加して訓読されていることに気付く。諸本での異同を確認してみても、陽明家本で「あめとやなりくもとやなりにけん」と助詞が補われるのみで、やはり過去推量の付加は共通している。「有所嗟」の通りに引用しているならば、ここは「女と仲睦まじく過ごしたこと」の意で、女性——妻・葵の上と過ごしたことは自分の経験であるから、過去のことではあっても推量で語る理由はないはずである。なぜここで「けん」と過去の推量が付加されているのだろうか。日本ではこの漢詩をどう訓読していたのか。以下に源氏の古注釈類で訓読が確認できたもの五例を挙げた。分かりやすいよう適宜スペースを開けてある。

奥入

…… あめとなり くもとなり いまはしらす

光源氏物語抄

…… あめとなり くもとやなり いまはしらす

一葉抄

…… 為雨 雲為つて 今(は) 知ず

明星抄

…… 雨と為り 雲と為りて 今はしらす

紹巴抄

…… 雨となり 雲となりにけん 今はず

こうしてみると、この中には源氏の本文と全く同じに読んでいるものは一つもない。このように訓読に差異が生じるのは、漢文を日本語に書き下す際、意味が通っていればある程度の自由があることによるためである。この点は現代の注釈においてももちろん同様で、先に引用した柴格朗氏による訓読でも「雨と為り 雲と為る 今知らず」というように少々異なるものとなっている。十六世紀の源氏注釈『紹巴抄』が過去推量を付しているが、かなり後世になってからのものである。藤原定家による『奥入』以降、確認できるうちのほとんどが源氏と異なる読み方をしているのは注目すべきであろう。これらの注釈が読んでいるのは典拠となっている劉禹錫の〈有所嗟〉であり、源氏はその〈有所嗟〉の一節を口ずさんでいるはずである。時代に差異があるとはいえ、同じ〈有所嗟〉の本文を訓読しているにもかかわらずこのような不一致が生じているということは、源氏が詠んだ一節はやはり〈有所嗟〉の訓読としては一般的でなかったのではないだろうか。そしてこの不一致には作者・紫式部の何らかの意図が働いている

ように思えてならないのである。

では、源氏が詠んだこの文面のままでどのように読めるのだろうか。「雨となり雲とやなりにけん、今はず」という言葉だけを捉えると、死んだ葵の上が本当に雨や雲になってしまったような言い方である。源氏の言葉に込めるように中将が詠んだ和歌を見ても、「空の浮雲をいづれの方とわきて」というように「雲が誰であるか見分ける」という発想が見て取れる。故事の言葉として読むには無理があるとすれば、本来このように読むのが自然な流れであろう。

それでは少し視点を変えて、伊行が言うように〈高唐賦〉だけを典拠としているとは考えられないだろうか。〈高唐賦〉では、女性は王の夢の中に現れる神秘的な人物だが、王が夢から覚めると本当に雲となってたなびいていたことになっている。しかしそうすると、今度は源氏の言葉が〈有所嗟〉に一致しすぎることが疑問となってくる。「今不知」に当たる言葉まで、四句目の全部を詠んでいるのだと考える方が明らかに自然である。むしろこれは、漢籍を知っている読者に〈高唐賦〉ではなく〈有所嗟〉の引用であると読み取らせるために「今はず」まで詠んでいるのだ、とも考えられる。それにこの後の場面に続いて登場する「霜枯れの前栽」や「草

枯れ」といったものも、劉禹錫に唱和した白居易の詩にある「西風北雪殺南花」から発想を得ているのではないかとの新聞(金澤)氏の主張もある。〈有所嗟〉を無視して良いとはどうしても考えられない。

漢籍から距離を置いて「死んだ人物が雨や雲になる」ということを考えてみると、まず思い起こされるのは「火葬の煙が空に昇って雲になる」という発想である。この類の表現は和歌によく見られ、多くの例がある。この場面より少し前、葵の上が亡くなった後の源氏の歌がまさしくそれである。

のぼりぬる煙はそれと分かねどもなべて雲居のあはれなるかな(葵——四八頁)

そして「雨」は、次の二例のように涙を雨になぞらえる表現となりうる。

あひ見ずてしのぶるころの涙をもなべての空の時雨とや見る(賢木——一二八頁)

おもひに侍りける人をとぶらひにまかりてよめる
ただみね

すみぞめの君がたもとは雲なれやたえず涙の雨とのみふる

(新編国歌大観『古今和歌集』巻十六・八四三番歌 哀傷歌)(金澤)

この場面では時雨が降っていることが冒頭で語られている。

漢詩が故事を踏まえたものであることを無視して読めば、源氏が「雨となり……」とひとりごちたのは、雨と雲を見て亡き妻の火葬の煙を連想し、自分の涙を雨に、煙を雲に寄せた和歌のような表現をしたのだと見えるだろう。現に数頁前には葵の上の火葬の煙を見て「のぼりぬる……」と空の様子を詠んでいる。その記憶が新しい読者たちはここでも自然とこの連想に至るのではないかと考えられるのである。源氏が朗詠している「雨となり……」の言葉は〈有所嗟〉の訓読として一般的ではなかったのではないかということも先に述べた。紫式部はこの一節の訓読を「なりにけん」とすることで、時雨から火葬の煙と雲、雨の関連を読者に想起させ、和歌的な雨と雲の哀傷表現を内包させようとしたのではないだろうか。

四

果たしてこうした漢詩文の意図的な改変は起きうるのだろうか。和歌の場合には、有名な例が『枕草子』「清涼殿の丑寅

の隅の」の段にある。

春の歌、花の心など、さいふも、上臈二つ三つばかり書きて、「これに」とあるに、

年経ればよはひは老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし

といふことを、「君をし見れば」と書きなしたる、御覽じくらべて、「ただこの心どものゆかしかりつるぞ」と仰せらるるついでに、「円融院の御時に、『草子に歌一つ書け』と殿上人に仰せられければ、いみじう書きにくう、すまひ申す人々ありけるに、『さらにただ手のあしきよき、歌の、をりにあはざらむも知らじ』と仰せらるれば、わびてみな書きける中に、ただいまの関白殿、三位中将と聞えけるとき、

しほの満ついつもの浦のいつもいつも君をば深く思ふはやわが

といふ歌の、末を、『たのむはやわが』と書きたまへりけるをなむ、いみじうめでさせたまひける」など仰せらるるにも、すずろに汗あゆる心地ぞする。

(新編日本古典文学全集『枕草子』第二段 五一〜五二頁
／小学館／一九九七)

清少納言の「年経れば…」の歌は、『古今和歌集』春上の藤原良房の歌を改変したもので、その機微を定子が褒めた。定子は、昔父の道隆が「しほの満つ…」という歌を改変して詠み、それが円融院に褒められたのだということ語った、という章段である。このように、既にある和歌を場に合わせて改変するといった例は多くある。そもそも「本歌取り」という技法自体がそれに類するものであろう。

それでは、漢詩文の場合はどうだろうか。葵卷のように訓読を変化させるものではないが、『源氏物語』の中にはもう一か所、漢籍の典拠がある文を意図的に操作していると思われる部分がある。柏木巻、薫の五十日餅の場面、源氏は薫の顔を見て様々なことを思う。夕霧とも似ていない。明石の女御の皇子たちのように気高くはあるが、優れて素晴らしいということはない。出家した女三宮や女房たちが周りにいる中で、源氏だけが一人世の儂さを思う。その中で静かに白詩の一節を口ずさむ。

大将などの児生ひほのかに思し出づるには似たまはず。
女御の御宮たち、はた、天帝の御方さまに、王気づきて
気高うことおはしませ、ことにすぐれてめでたうしもお
はせず。(中略)宮は、さしも思しわかず、人、はた、さ

らに知らぬことなれば、ただ一ところの御心の中にのみぞ、あはれ、はかなかりける人の契りかなと見たまふに、おほかたの世の定めなさも思しつづけられて、涙のほろほろとこぼれぬるを、今日は事忌すべき日をとおし拭ひ隠したまふ。「静かに思ひて嗟くに堪へたり」とうち誦じたまふ。五十八を十とり棄てたる御齡なれど、末になりたる心地したまひて、いとものあはれに思さる。「汝が爺に」とも、諫めまほしう思しけむかし。（柏木——三三三—三三四頁）

「静かに思ひて……」「汝が爺に」はともに「自嘲」という題で知られている律詩の一節で、五十八にして初めて男児をもうけた白居易が詠んだものである。この「自嘲」は同時に詠まれた二つの詩のうちの二首目で、一首目は「相賀」とされ、同時期に同様に子供をもうけた元稹と喜びあうものである。「自嘲」の書き下し文は、新編日本古典文学全集（小学館）を参考にしている。

自嘲（其二）

五十八翁方有後 五十八の翁方に後有り

静思堪喜亦堪嗟 静かに思ひて喜ぶに堪へ亦嗟くに堪

へたり

一珠甚小還慙蚌 一珠甚だ小さく還蚌に慙つ
九子雖多不羨鴉 九子多しと雖も鴉を羨まず

秋月晚生丹桂実 秋月晚く生る丹桂の実

春風新長紫蘭芽 春風新たに長ず紫蘭の芽

持盃祝願無他語 盃を持ち願を祝して他の語無し

慎勿頑愚似汝爺 慎んで頑愚汝が爺に似ること勿れと

（『白氏文集歌詞索引』下（那波本 陽明文庫蔵）二八二

一・三三八頁 同朋舎／一九八九）

五十八歳にして初めての男児を得た喜びに溢れている。しかしその一方で遅すぎたとも思ったのだろうか。ともあれ自分の頑愚に似てはいけなさと息子に語りかける。「汝が爺に」とは、薫にとつては柏木である。「柏木に似てはいけな」と源氏は思ったのだろうか、と語り手も推測している。この典拠を見て気付くのは「堪喜」が源氏の朗詠では省略されていることである。この点については『湖月抄増注』^{（注）}に師説として「よるこぶにたへたりといふをば略して、なげくにたへたりと云へるは、源氏の御心にかをるの生れ給へるを、なげかしくのみおほす故也」との言及がある。源氏は薫の出生を「喜」んでいないから「堪喜」を省略して「堪嗟」だけ

を源氏に朗詠させたというのである。この説の通りならば、ここでも作者の操作によつて漢詩の一部に手が加えられている。いわば漢詩を典拠とした本歌取りのような手法がとられているといえるのではないだろうか。

おわりに

これまで、典拠となっている〈有所嗟〉の該当部分は〈高唐賦〉に由来する美女の形容や男女の契りを指した言葉であり、同時に〈有所嗟〉自体が女性との死別をテーマとした作品であること、また、紫式部は典拠となっている漢詩の訓読を工夫することにより、和歌的な哀傷表現をそこに加えていることを分析した。最後にそれらを踏まえた上で、この場面の二人のやり取りを再考してみる。

時雨の降る夕方、三位中将がやってくる。源氏は西の高欄にもたれ、霜枯れした前栽を見ていた。風が荒々しく吹き時雨がさつと降ると、源氏は自然に涙腺が緩み、その雨にちなんで劉禹錫の〈有所嗟〉を口ずさむ。その一節を引きつつも、訓読に少し手を加えて、雲と雨を用いた哀傷的な要素も入れた。その物憂げな様子を見て中将は、「女であったなら、源氏を見捨てて亡くなった魂は必ずこの世に留まってしまふだ

らう」と感じる。劉禹錫の詩では、死んだ女の魂はオシドリの片割れになつて漢陽にいるのだった。そこで中将も、源氏の口ずさむのに答えるように、〈高唐賦〉や〈有所嗟〉、和歌の表現を踏まえた歌を詠む。「雨となつて時雨れる空の浮雲を、どれを故人と見分けて眺めようか」——〈高唐賦〉の神女は朝の雲、暮れの雨となつた。劉禹錫の愛人・鄂姫は一羽だけのオシドリとなつた。葵の上はどこへ行つたのか——中将がそう独り言のように言うと、今度は源氏が歌を返す。「契り合つた人が雨となつた空までもたいそう時雨れてかきくらす今日この頃」——その様子を見た中将は、長年不和を抱えていたように見えた彼らの夫婦生活について、周りの期待の為に一緒に居たのではなく正妻として特別に思つてくれたのだ、と感じ取つた。同時に葵の上の死をはかなみ、左大臣家と源氏の関係が希薄になつてしまふことを嘆くのである。

なぜ中将がそう感じたのか。〈高唐賦〉や〈有所嗟〉を振り返つてみると、暮れ方の雨は神女が姿を変えたものであり、「為雨為雲」とは男女の深い契りのことである。源氏は「見し人の雨となりにし」と、葵の上が雨になつたことを歌の中で示唆し、その歌は暮れ方の時雨を見ながら詠まれている。神女が暮れ方に雨となつて降ることに重ねるように、葵の上も雨となつて源氏の元に降っている構図が浮かんでくるのであ

る。歌を聞いた中将は、その構図に気付き、傷心に沈んだ源氏の面持ちから、源氏の葵の上への愛情に気づいたと読むべきではないだろうか。

今回取り上げた場面の源氏の言葉からは、源氏が葵の上を妻として愛していたこと、またそれ故に葵の上の死に深く悲しんでいる様子が読み取れる。それらは故事を含んだ漢詩と和歌的な表現に寄せて語られ、中将の眼差しを通して読者はそれを知ることとなる。この後、物語の焦点は源氏と葵の上から源氏と紫の上に移る。長編『源氏物語』を見る時、葵の上は息子・夕霧を生んで死去し、正妻の座を空けることにその役割があるといわれてきた。物語からは早々と退場してしまい、源氏の四季の御殿・六条院に住むことの叶わなかった葵の上であるが、しかし今回の場面を詳しく読み解いていくと、源氏から心からの愛情がこもった哀傷がなされていたことが浮かび上がるのである。

注

- 注1 新聞一美氏「元白・劉白の文学と源氏物語——交友と恋の表現について」(『源氏物語と漢文学』／汲古書院／一九九三)
- 注2 新聞氏 同右注8
- 注3 新編国歌大観『歌集』勅撰集編二六頁(角川書店／一九八三)
- 注4 新編日本古典文学全集『源氏物語④』五七六～五七七頁(小学館／一九九六)

注5

館／一九九六)
北村季吟原注・猪熊夏樹補註・有川武彦校訂『増注源氏物語湖月抄』中巻 九八〇頁(弘文社／一九二七)

(にのみや あいり・本学大学院博士後期課程)